

◆◇「徘徊模擬訓練」の元祖大牟田が「徘徊」という言葉をやめるまで◆

2015年1月25日、「認知症の人とともに暮らすまちづくり宣言10周年市民の集い」が、日本医師会の横倉会長や古賀市長など1200人が集まって開かれました。

全国から視察が絶えない模擬訓練の様子を、笑いあり涙ありのドラマ仕立てで、市民が好演。その中で、「徘徊」という言葉を、「10年を節目にやめる」との提案がありました。

「徘徊」を辞書でひくと「目的もなく、うろうろと歩きまわること」。けれど、行方不明になった人にとっては、「おでかけ」や「買い物」など、それぞれに訳があるとわかったから、と説明されました。

とはいえ、長年親しんだ模擬訓練の名前を変えることに市民が納得できるまでには、紆余曲折がありました。2015年8月8日に届いた「大牟田市認知症ケア研究会」の代表、大谷るみ子さんからのメールを抜粋します。

——*★*——

1月25日、「徘徊」という言葉を使わないと地域へのアピールを行いました。けれど、「今年度の模擬訓練の名称から徘徊という言葉を使わない」とした方針には、実は、賛否両論でした。

「10年以上使ってきて定着した言葉、真の意味を理解できていればいいではないか」

「徘徊という短い言葉で、イメージしやすい」

「徘徊だったから全国に模擬訓練が広まったのではないか」

「徘徊という言葉だと緊張感があり、早期発見につながる」

などといった意見でした。

そこで昨日、8月7日、市内全校区代表者会議を持ちました。

★徘徊という言葉が、認知症の人が引き起こす「問題行動」としてとらえられ、

★理解不足が誤解や偏見、社会的排除につながっているという社会の実態、

★わが国初の認知症の当事者団体が発足し、「認知症になってからも尊厳をもって暮らし続けたいと願っておられる

★大牟田でも、「何で徘徊っていうのかなあ、あてもなくさ迷っているんじゃないけどね。

といった発言されたことなどをお伝えし、

★認知症のご本人や家族の気持ちに寄り添い、尊厳を守るという観点から、市の姿勢として今年から模擬訓練の名称から「徘徊」という言葉を使わないという方針を、改めて、伝えました。

みなさん、真剣に考えてくださいました。

その中で

「当事者団体が発足し、人権を守るために活動されていることを知り、徘徊という言葉を使わないとする市の姿勢に納得した」

「大牟田は今、小中学生や高校生といった次世代につながるまちづくりを行っている。次世代にしっかりと尊厳を考えたまちづくりを伝えていく上で、徘徊を使わないことに賛成だ」

「以前、テレビの取材の依頼を受けて、当事者と家族に、“徘徊”されている姿を取材していいか了解をもらわないといけなかったが、“あなたが徘徊しているところを取材させて欲しい”とはどうしても言えなかった。何か徘徊という言葉を使うことに違和感があった。」

など、地域住民からの意見がありました。

私は、

「安心して徘徊できる町をつくろうと取り組んできたことが間違いではなく、訂正でもなく、

これまでの取り組み成果が、徘徊をネガティブにとらえないという住民意識であり、多くの市民が関心を持って日ごろから認知症の人の見守りを行っているということです。

これまでの取り組みを、認知症になってからも人権が守られ、安心して生活を続けられるまちへ、一歩前進させることが、徘徊を使わない模擬訓練の提案です」

とお話ししました。

そして、「大牟田が変われば全国が変わるのです。その意義は大きいのです」と。昨日の会議で、地域全体で徘徊を使わないとする姿勢や方針の共通理解を図ることができました。

問題意識を持ちながらも敢えて徘徊とつかってきた大牟田が、一つ生まれ変わった瞬間でした。

長々となりましたが、大牟田からのご報告です。